



Enjoy Dermatology!

加藤 則人

京都府立医科大学北部キャンパス長

皮膚科の病気の多くは皮疹をみた瞬間に診断がつく。しかし、診断だけでなく、1人1人の患者の皮疹について「どういう理由でこの皮疹ができたのか」「どういう理由で悪化したのか」「どうしてよくならないのか」を考え、そのストーリーがわかって得心して治療ができ、その結果皮疹が軽快したときに、大きな喜びを感じる。

目の前の患者の皮疹や痒みが生じる仕組みを自分の中で十分に理解して「筋の通った診療」をしたいという思いに反して、私が皮膚科医になった平成元年(1989年)当時はアトピー性皮膚炎の病態は明らかでなく、日々の診療でも釈然としない思いがあった。そんな中、炎症性皮膚疾患の病態を自らの研究で明らかにしていく国内外の多くの先輩皮膚科医たちの講演や論文に大きく心を動かされ、自分も研究をしてみたいと思うようになった。

研究をしてみると“目の前でおこっているこの現象を世界中で知っているのは自分だけだ”と胸が躍る瞬間がある。研究を進める過程で科学的に思考する習慣が身につくと、日々の診療をより科学的に考えて行うようになり、患者への説明や処方も自信をもってできるようになった。また、研究を通じて全国・世界中に多くの仲間ができたことは人生の大きな財産になった。日々の診療で生まれた疑問や課題に対して、自らが研究をして答えを見出すことは、臨床医だからこそできる極めて貴重なものであり、若い皮膚科医の皆さんには基礎研究、

臨床研究を問わず、研究の世界に一步を踏み出してみることをお勧めしたい。

「皮疹がよくならない」理由の1つに、医師が期待したとおりに患者が薬を塗っていないことがしばしばある。アトピー性皮膚炎の治療では、外用薬を広い範囲に塗るという手間のかかる作業を患者自身が長い間続ける必要があるため、医師が期待した治療効果を得るには患者の外用治療のアドヒアランスを高めることが大切である。治療アドヒアランスを高める方法を模索する中で、患者とのコミュニケーションスキル、治療意欲を高めるコーチング、さらには解決思考アプローチを含むブリーフセラピーなどの心身医学的なアプローチを学んだ。アトピー性皮膚炎をはじめとする慢性皮膚疾患の診療にこれらのスキルを活用することで、これまでと同じ薬を処方しても治療効果が格段に高まる経験を何度もすることができた。これらのスキルは、診療の場面だけでなく、普段の生活でのさまざまな人たちとのコミュニケーションにも大いに役立っている。

皮膚科の診療に、自分が興味をもてる「何か」を加えると、それが単なる足し算ではなく掛け算になって、治療効果や患者満足度が高まり、皮膚科の診療がより楽しくなるかもしれない。そして、それは人生そのものを豊かにしてくれるかもしれない。